

# 実践女子大学所蔵吉原細見目録

## はじめに

これまで、吉原細見を調査・整理した先行研究に、洪井清著『吉原本』（昭和十一年、古版画研究学会）、八木敬一・丹羽謙治編『吉原細見年表』（日本書誌学大系72、平成八年、青裳堂書店）などがある。特に、八木敬一・丹羽謙治編『吉原細見年表』（以下、『吉原細見年表』）は、江戸期に限らず大正期に至るまでの吉原細見がほぼ年代順に整理されている。

異板についても、『吉原細見年表』は以下のように指摘する。

細見はその性格上、毎年春秋の大改以外にも細やかな

## 後藤ひとみ

改訂が行われるのが常であった

（「吉原細見年表凡例」）  
細見にはよく「毎月改」などと書かれているが、これは通り一遍のこととばかり言えず、実際に細かく訂正することもあったようである

〔解説〕⑳備考 三 異板関係・入木）  
しかし、「本書では同種の細見の本文比較は多くの場合行っていない」とし、詳細な調査はされていない。遊女の名が張り紙によって訂正される例として、『目明千人』（明和七年）と、「内容に異同が見られる」例に『百夜章』（安永三年）の二点を挙げている。

今回、実践女子大学所蔵の吉原細見について調査した結果、計七点の細見の異板が確認された。張り紙による異同

がある細見や、入れ木による異同として遊女、遊女の格・順位の変動や、店の移転などの例や、序文以外が全くの異板である例などがみられた。

本稿では、まず実践女子大学所蔵の吉原細見三十二点について年代順に整理した。その上で、実践女子大学本と同本とされる他の伝本と比較し、異同があるものについては、その有り様を具体的に示すものである。

## 凡例

最初に通し番号・刊年・所蔵先・所蔵文庫名・請求番号を示した。『吉原細見年表』の凡例に従った。今後、異同の存在が判明する可能性があるため、①書名、④見返し、⑨構成、⑪刊記、⑱異同の表記は旧字体・異体字などを新字体に改めず、原文に従った。それ以外の項目は、異同が見られないものとし、旧字体・異体字などは新字体に改めた。

- ①書名 登録書名／『吉原細見年表』での書名として記した。
- ②刊年
- ③表紙

④見返し

⑤序文 全文を載せた。表記はできるだけ原文に沿ったが、通行の字体に改めた箇所もある。

⑥口絵・挿絵

⑦柱刻

⑧丁付

⑨構成

『吉原細見年表』では「藝者名寄せ」と「男藝者之部・女藝者之部」と表記が別れていたが、実践本ではいずれも「男藝者之部」「女藝者之部」とあったので、「男藝者之部・女藝者之部」と統一した。

⑩本文の記載法

⑪刊記

⑫改所・売所

⑬本の大きさ

⑭匡郭

⑮完・不完

⑯印記 現所蔵先以外の印文・形・色を記した。

⑰備考 『吉原細見年表』での備考である際は文末に〔年表〕とした。仮宅

⑱異同 A 対照とした細見〔請求番号〕

B 異同結果

本文内の異同の場合、遊女ごとに「／」を入れて区切った。「／／」は段を変えて改行されたことを表す。遊女につく禿の場合、「(遊女名) (禿名)」とした。また、「かふる」「げいしゃ」「やりて」などはゴシック体に変えた。字体は原文に沿った。実践女子大学所蔵本を「実践本」、異同をとった細見を「対照本」と表記した。

遊女の格は以下の通り、算用数字にした。



1 享保十六年 文芸資料研究所 (請求番号ナシ)

- ① 吉原さいけんの絵図／『吉原さいけんの繪圖』
- ② 享保十六年
- ③ 原表紙 薄縹色巾つなぎ
- ④ 五十間道筋と廓内茶屋などの見取図と吉原及び付近の略図／『吉原さいけんの繪圖』筆工 近藤助五郎清春筆
- ⑤ 序なし

板元口上

▲右細見之図此度みさいに改女郎出入新造つき出し座敷持へや持一人かふる新金式朱太夫格子さん茶うめちや毎月相改令板行者也

毎月改人形丁通り  
ひらのや善六板

- ⑦ (丁付)

- ⑧ 二〜二十五 全26丁

- ⑨ 見返し・廓内茶屋などの見取図・本文・年中月なみも日・合印・板元口上・刊記

- ⑩ 向かい合わせでない 江戸町一丁目右側から

- ⑪ 毎月改人形丁通り  
ひらのや善六板

- ⑬ 横本 縦 一〇・九×一六・二糎

- ⑭ 九・〇×一四・〇糎

- ⑮ 完

- ⑱ A国会本 [209-228]

B 異同箇所は刊記部分で、対照本には「享保十六亥毎月改」とあるが、実践本には「享保十六亥」が削られ、「毎月改」とのみある。

- 2 寛保二年春 大学図書館・近世資料 384/Y 93

- ① [吉原細見]／『里鹿の子』(板元口上による推定題)


- ② 寛保二年春

③替表紙 黄土色卍繋ぎ

⑤板元口上

口演 山本暁鶴堂(印)

例年細見相改新板出シ候処ニ殊外売ク御座候而不斜大廈  
仕候猶又当春ハ里鹿の子と号あらたに板行ひらき御手入  
申候尤私方の細見之儀兩人ニ而毎月吟味仕候所聊相違無  
御座候御求御覽被遊可被下候以上

⑦  (丁付)

⑧ 二〇十五、十九、十七、二十、廿(破レ)、廿五、  
二十六 全25丁

⑨品定(合印と値段付け)・板元口上・刊記・廓内茶屋な  
どの見取図・本文・船宿名寄せ(紋入り)

⑩向かい合わせでない 江戸町一丁目右側から

⑪寛保二戊 あげや町 現金屋八藏

毎月改所 横町二丁目 本屋宗兵衛

板元 大てんま三町目 山本九左衛門

⑬小本 横 一〇・二×一六・〇糶

⑭八・七×一四・四糶

⑮不完か

⑰十二丁重複(異同無し)

3 文化十一年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/1

①「吉原細見」／「新吉原細見」

③原表紙 薄栗色無地

④「揚代金直段附合印平日定」[年中月次もんど]

⑤序半丁

春霞はるかすみ立るやいつこみよしの、花をかざりし初買ハ四ツ  
手に三布をしき始の七布にねの日の松の位贖身の黄金を  
羽子板はこいたにうつし手まりのつき出し数多くひるふうみいよ  
ういつもかわらぬ二日の道中みちうちうまだ見ぬ恋めのすごろくの  
其細見を松の葉の五ツの町の君が名をこ、にうつすや鏡  
餅もちかされる華の桜木に尽せぬ里の全盛を寿きしるすこ  
としかり

⑦ さいけん ○ (丁付) / さいけん (丁付)

⑧無丁(一丁)、二丁卅七 全38丁

⑨見返し・序・五十問道筋と廓内茶屋などの見取図・本  
文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船  
宿・會所舟持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪文化十一年 改所 浅草 北馬道 小泉忠五郎

初春改 板元 横山町 一丁目 葛屋重三郎

⑬中本 縦 一七・四×一二・〇糶

⑭一四・〇×一〇・四糶

⑮不完

⑰裏表紙欠。

⑱A 東京誌料本 [0792-22]

B いつみや清蔵が対照本、十四丁オに店を構えるが、実践本の同所では削られている。実践本ではいつみや清蔵は廿六丁ウにあるため、対照本から実践本に至るまでに移転したことがうかがえる。この二点を比較すると「わかなみ・花さと・こませの」などの格が5から4へ昇格し、「とみやま・ことふき・ときわる」などが対照本にはおらず、実践本では在廊することから、新たに追加されたと思われ、対照本が先に出版されたと考えられる。

○対照本・いつみや清蔵（十四丁オ）

5 わかなみ / 5 花さと / 5 こませの / 5 うたはし / 5 やえ花 / 5 花のゐ / 5 き代たき / 6 きよ花 / 6 わかむめ / 6 はな町 / 6 はなそめ / 6 うめきく / 6 きくなみ / 6 はなまつ / 6 はなさき / かむろ / きくし / うめし / つるし / ももち / まめし / やりて / しけ

○実践本・いつみや清蔵（廿六丁ウ）

4 わかなみ / 4 花さと / 4 こませの / 4 うたはし / 4 やえ花 / 4 花のゐ / 4 き代たき / 5 きよ花 / 5 わかむめ / 5 はな町 / 5 花そめ / 5 うめきく / 5 きくなみ / 5 はなまつ / 5 はなさき / 6 とみやま / 6 ことふき

6 ときわる / 6 わかつる / 6 はれむめ / 6 春のえ / かむろ / きんし / うめし / つるし / ももち / まめし / やりて / しけ

他の異同箇所には四丁ウが挙げられ、東京誌料本では越前屋ふさが店を構えるが、実践本では赤蔦屋忠五郎となる。先に記したように、実践本の廿六丁ウではいつみや清蔵が移転しているが、その前と考えられる東京誌料本の廿六丁ウは、蔦や忠之介の名がみえる。

○対照本・蔦や忠之介（廿六丁ウ）

4 鳥しの「はるし」 / 4 綴喜「つけの」 / 4 千足「ちよの」 / 4 妹脊「わかは」 / 5 大和路 / 5 そめのは / 5 ちよきく / 5 みやはし / 5 そのむめ / 5 三千とせ / 5 そめきぬ / 5 いくたの / 5 きぬかた / 5 きぬたき / 5 と代なみ / 5 かつらき / 5 きぬ山 / 5 ちよつる / 5 みちのく / 6 しの、め / 6 きぬあや / 内けいしや / 八重 / かよ / やりて / よし

4 文政五年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/2

①「吉原細見」 / 「新吉原細見」

②文政五年秋

③替表紙

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤ 序半丁

秋の野に。人まつむしの声すなり。我かどゆきていざとへバ。姿よし原。女郎花。ひとめ見しより撫子の。床なつかしき。愛敬のこぼるゝ萩の花ずりに。色を争ふ夕風や。ゆかしまねく。尾花が袖。籬の菊のうつろハで月に千とせの秋かけて。契ハ尽ぬる。いつ迄も。五葉の松のことぶきを巻の始に述はべる事しかり

壬午秋

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 無丁(二丁)、二丁十、十一ノ十二、十三ノ二十六、二十七ノ廿九、三十ノ三十九 全36丁半

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船宿

宿

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 欠

⑬ 中本 縦 一七・〇×一一・九糎

⑭ 一三・七×一〇・三糎

⑮ 不完(替表紙、巻末欠、三十六丁以降下部に破れ)

⑯ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守/文庫」(朱、鐔形)

5 文政十年春 大学図書館・近世資料

384/Y 94/3

① 「吉原細見」/「新吉原細見」

② 文政十年春

③ 替表紙

④ 欠

⑤ 序半丁

春霞たつるやいつこみよしの、花をかさりし初買は四ツ手に三布をしきそめの七布に千世の姫はしめ贖身の黄金を羽子板にうつすてまりのつき出しひみふうみいよういつもかわらぬ二日の道中また見ぬ恋目の双ろくのその細見を三津乃朝五ツの町の君か名をこ、にうつすやか、み餅かされる華の桜木に尽せぬさとの全盛を寿きしるすことしかり

丁亥のはる

金花山人誌

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 二ノ二十一、廿二ノ廿三、廿四、無丁(二丁)、二十六ノ三十八 全36丁

⑨ 序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑬ 中本 縦 一六・八×一二・〇糎

⑭ 一三・九×一〇・三糎

⑮不完

⑬「浅野守文庫」(黒、長方)、「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鏢形)

⑭見返し・田町編笠茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・龍泉寺町茶屋・刊記欠。二十五丁は柱が消えており無丁となっているが、上下逆に綴じられている(異同なし)。書込あり。

⑮ A 東京誌料本 [0792-8]

B 実践本の廿二ノ廿三丁ウでは、小堀やゆうが店を構えているが、対照本では削られており、小堀やゆうは対照本の他の箇所にも見られない。

6 文政十一年春 大学図書館・常磐松文庫 384.9/1

①〔吉原細見〕／〔新吉原細見〕

②文政十一年春

③原表紙 薄栗色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤序半丁

昔、唐土齊の菅仲ハ太平を計りて西湖に女閨三百軒を造建といへども如何か及ん我國の日本堤の春げしき野草芳菲たり紅綿の地一目千金、賑ふ花の大門口見反、柳は青糸を繰出す柳巷花街天性麗質の遊君的星の如く集り銀漢

ばんり 容貌雲の鬢、百の姫ある太夫、五葉の松ハ色廊の春の名寄を寿て又新玉理増多吉原細見の序としかいふ  
文政戊子の初春 五柳亭徳升誌

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 一ノ廿一、廿二ノ廿三、廿四ノ三十九丁 全38丁半

⑨見返し・序・五十問道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪文政十一年 改所 北馬道 小泉忠五郎

初春改 板元 三傳馬町 三丁目 葛屋重三郎

⑬中本 縦 一七・三×一二・四糎

⑭一三・六×一〇・四糎

⑮完

7 天保二年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/4

①〔吉原細見〕／〔新吉原細見〕

②天保二年

③替表紙 浅葱色無地

④序半丁

来るとしも又くるとしもかハラぬは実に全盛のきみあれハ日本一と唄ふなる大門口の賑ひハ去年に今とします

か、みうつる心にかよひきてしるもしらぬもうちむれて  
うたふも舞ふも花のものと思ひ／＼の花の香をとめきのか  
ほり袖の香にたゝませてみる嬉しさはほんに錦のつりよ  
きのうちそゆかしきはなのよし原

辛卯初春

南子盛

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 一ノ二十、二十一ノ廿二、廿三ノ三十六、三十八 全36  
半丁

⑨ 序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・田町編  
笠茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 天保二辛卯 改所 浅草 北馬道 小泉忠五郎

初春改 板元 小傳馬町 三丁目 葛屋重三郎

⑬ 中本 縦 一七・二×一二・二糧

⑭ 一三・八×一〇・三糧

⑮ 不完

⑰ 見返し・男藝者之部・女藝者之部欠。

8 天保十四年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/5

① 「吉原細見」／「新吉原細見」

② 天保十四年春

③ 替表紙(厚表紙・薄栗色無地の上に薄香色無地の表紙を

貼付)

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤ 序半丁

夫新玉の寿は千鶴万亀と人ごとにいハる祝ふや初物日

客の喜多留を松の内はや鶯も口ひらきほう宝家婦やうも

耳かゆく実このまじに此里の名物ハ甘露梅あけなうほいに揚当婦あけなうほい竹木心あけなうほいも和

らぎて内うちそろふたる繁花はなと恵方あきまゐりの手土産てみやげハ木きにな

る餅もちの舞玉まひたまに祝いわひ付つけたる宝舟たからふね一度いちどにひらく花はなの里さとおひ

〳〵重しげる五葉松ごようのまつ先一福さきいつふくと是これもふく〳〵

卯の初春

瓢金亭花好誌

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 巻ノ四、五ノ六、七ノ四十一 全40丁半

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本

文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船

宿・會所船持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 天保十四癸卯 改所 浅草 北馬道 小泉忠五郎

山下半兵衛

⑬ 中本 縦 一七・一×一一・七糧 春改 版元 日本橋 岩倉町 星野源次郎

⑭ 一三・六×一〇・三糧

⑮ 不完



9 天保十四年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/6

①〔吉原細見〕／〔新吉原細見〕

②天保十四年秋

③原表紙 薄栗色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤序半丁

うつりけり。月の都の女郎花。夫は見ぬ世の天上界。是は日の本の別世界。月の都の名に恥ず。四季に絶せぬ女郎花。露もうつろふ真如の月。仇と意気地の弦月に。桂男を夕月や。更待月に立待居待。逢て嬉しき満月ハあれど。野末の月をいとふものふし。そも新月の始より。名高き月の影清く。酔な好男望月に。在明の月に別れを惜しむ。実に月宮の不老不死。長生の門ともいひつべき。月の桂の斧の跡。くちせぬ御代ハ枝も葉も。繁く栄えし五ツ葉の。松の千とせの末かけて。ますく賑ハふ事を祈るになん。

玉兔の秋

雀巢園しるす

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 巻々四、五ノ六、七々四十二 全42丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船

宿・會所船持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 改人 浅草雷門内 小泉屋

天保十四癸卯

秋改

⑬ 中本 縦 一七・〇×一・六 横 一三・八×一〇・二 糎

⑭ 完

10 天保十五年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/7

①〔吉原細見〕／〔新吉原細見〕

②天保十五年秋

③原表紙 薄栗色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤序半丁

序

いさましや秋ハ角力も千種まで野辺に錦の紐といて風が  
行司の花角力うごかぬ御代の印にハ雲のはそでをぬぎ  
捨て富士とつくばの立合に劣らぬ廓の君達をあをぐうち  
わの揚つめにいきぢの弓も張つよく口舌の秋の衣ハ  
とめる柳もミカへらずもどる燕の別路にアレはつ厂的ハ  
もんじその音信の文さへもよるハみだれておもひ羽を互

ひにむすび取組ハこ、も相撲のよし原と代々にのれんのかけまくも云

天保十五辰初秋

万亭おう賀誌

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 巻ノ四、五ノ六、七ノ四十二 全42丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船宿・會所船持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 改人 浅草雷門内 小泉屋忠五郎

天保十五甲辰 飯田町中坂 山下屋半兵衛

秋改 板元 飯田橋岩倉町 星野屋源次郎

⑬ 中本 縦 一七・一〇一・八糎

⑭ 一三・八×一〇・二糎

⑮ 完

11 弘化三年春 大学図書館・近世資料 384Y/94/8

① (吉原細見) / 『仮宅細見』(序題)

② 弘化三年春

③ 替表紙

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もん日」

⑤ 序半丁

仮宅細見序

川柳点の秀逸に「鳳凰の曰でやう歎ノヲ麒麟」実に聖代の四方の春。傘さしかくる門飾も。初道中の姿めく。花街の模様を爰に思へば。空の緑を青簾。三筋引なる夕霞は。見勢清攬をやしのぶらん。別て当年はめづらしく。廓の外なる大黒舞曲撥みする太神楽獅子舞は狐屋に似て捻銭の泡雪を積らせ。鳶風は四季着の孔雀染に代りて羽袖を東風に翻せり。茶屋が仮居の家移蕎麦は。是布ぞめの裏表と。見る物毎に春めきて。不覚浮気通路も。こがれて走る猪の牙船。急て飛する翅。息杖の竹水馴棹。夜を日に不別諸方の賑ひ。万客競へば此所も又。則人の山の宿なる。

丙午春

玉楼の仮宅に寓宮して

柳下亭種員述

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 無丁(二丁)、巻ノ四、五ノ六、七ノ三十二、又三十二、三十三ノ四十二、無丁(二丁) 全46丁半

⑨ 序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 改人 浅草三軒町 小泉屋善兵衛

弘化三丙午

板元

飯田町中坂

山下屋半兵衛

春改

中橋東中通り 下横町

星野屋源次郎

⑬ 中本 縦 一六・八×一一・六 纏

⑭ 一三・六×一〇・二 纏

⑮ 完

⑯ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鏝形)

⑰ 住宅(欄外)。序に名主一印「濱」。各店の下部に仮宅先の住所が記される。三丁重複(異同無し)。

12 弘化四年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/9

① 「吉原細見」／「新吉原細見」

③ 原表紙 薄栗色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤ 序半丁

池 凍東頭風度解窓梅北面雪封寒といへる章句に似て新に造る花街の楼年の内に春ハ来にけりと旧冬より門を開きしもあり俣は跡より日の歩行羊の好なかみ詣恵方に見世を秋のかた万よし原初買は東岸西岸の柳橋より舟と駕遅速不同芸者即智の弾初音声已異笙寿の春のつき出しは春風処々に情を契り我にて知りぬ花盛心のとけき履音は雲井に知らぬ勤にて桜か

ざして暮せども暇ハあらぬ遊女の柳の姿艶しく実には  
ひをこきまぜて廓そ春の錦なりける

弘化四未春

六采園

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 無丁(二丁)、二、四、五六、七、廿五、又廿五、二十  
六、四十一 全44丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船宿・會所船持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 改人 浅草三軒町 小泉屋善兵衛

弘化四丁未 版元 飯田町中坂 山下屋半兵衛

春改

中橋東中通り  
下横町

星野屋源次郎

⑬ 中本 縦 一七・一×一一・六 纏

⑭ 一三・六×一〇・一 纏

⑮ 完

⑯ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鏝形)

⑰ 序に名主一印「衣笠」(大阪市立大本と実践本以外は名主双印「衣笠」「濱」。三十八丁重複(異同無し))。

①「吉原細見」／「新吉原細見」

②弘化四年秋

③原表紙 薄栗色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もん日」

⑤序半丁

序

茶屋船宿が送り迎の焼灯は軒の灯笼と友に一寸先の闇の  
夜も輝くいろのさま／ハ実に青楼の秋けしき花や紅葉  
と見渡せば向の人ヲ、ト張上る禿が声に黄色ありおるらん  
が八文字の道中ハ紅裾赤き色ながら涼しく長柄に薫る風  
さへもいとなつかしくまだ帷子の世間なるに白妙の小袖  
を飾る八朔の姿ハ天津乙女の庚寒宮雪の肌へぞゆかしき  
其白き事をしりて亦黒塗の堂嶋の音絶間なく千金を軽し  
として万客の廓月ぞ最中に全來の五街に五色を見立た  
る夜光の袖の見世出前にかきならずが、きは心も引立趙  
氏連城の玉を拾わんとならば昆山に生る此五葉の松の  
元に繁り歩行を運びたまへかし

未の初秋

自在庵 五登久(印)

⑦ さいけん (丁付)

⑧無丁(一丁)、巻く四、五六、七く十四、無丁(二丁)、

十六く廿五、又廿五、廿六く三十五、又三十五、三十六

く四十一 全44丁

⑨見返し・序・五十問道筋と廓内茶屋などの見取図・本  
文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船  
宿・會所船持・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 改人 浅草三軒町 小泉屋善兵衛

弘化四丁未 版元

秋改

飯田町中坂  
中橋東中通  
下横町

山下屋半兵衛  
星野屋源次郎

⑬中本 横 一七・一×一・七纏

⑭一三・六×一〇・〇纏

⑮完

⑯「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鐔

形)

⑰序に名主双印「衣笠」「濱」。

14 嘉永元年秋 大学図書館・常磐松文庫 384.9/4

①新吉原細見記／「新吉原細見」

②嘉永元年秋

③原表紙 浅葱色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もん日」

⑤序(A)一丁

江口神崎のあかれりし世はいかなりけん大磯化粧坂の鎌

倉風も何とかやふるめきことそきてけはひなつかしから  
 すそ有けんこの吉原の廓に衣の色目物の調度すへて何も  
 く〜みやひかに上らうしくかつ今めき花やかなるかたさ  
 へまさりて世にありとある遊ひの所定めせんにハ疑ひな  
 き上の品にそ有へきそれか名寄の書をハ細見となんいふ  
 年頃その摺形木伝へもたるものありて年に二たひ改め正  
 すといへとも稀々にハ聊の訛りはたなきにしも非す又近  
 き頃同しさまなる疑ハしき書もかつ〜見えしらかふめ  
 るを君かて、なる玉屋のあるしよろつまめく〜しき人に  
 てこの秋その摺形木を残らすあかなひ得て家にをさめ猶  
 よく心を用て何くれと改め正し今より露ハかりの訛りも  
 なるへくおきて定めつこの後さる紛ハしき偽せ書あり  
 とも見ん人其心してなまとハされ給ひそ

嘉永とあらたまれる年の初秋

一閑齋

序(B)半丁

不老の大門に入りてハ長生殿の私語をちぎり青楼の月  
 にハ二千里の外の深き馴染を思ふ軒の灯籠の種々に秋の  
 千草の錦をうつして中を行かふ君達の色を競へる愛敬は  
 こほる、斗の萩の露玉をつどへし此廓の笹に匂ふ女郎  
 花宿りハすべしとまらうどのうち群れくるわの細見記棚  
 機祭文月のはじめニツのほしの君か名よせに懸る願ひ  
 の糸口をとこながれの里の洗ひて清樹君か硯をかりそめ

に

嘉ひ永き申の秋

中世楼のあるし千億述

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 序、壹、一〜四、五ノ六、七〜廿五、又廿五、廿六〜三

十五、又三十五、三十六〜四十一 全45丁

⑨ 見返し・序・五十問道筋と廓内茶屋などの見取図・本

文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船

宿・會所船持・土手茶屋・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永元年歳次戊申初秋 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一六・九×一二・四糎

⑭ 一四・〇×一〇・五糎

⑮ 完

⑰ 序(A)に名主双印「濱」「衣笠」。実践女子大本に原題簽あり。四周単辺、九・〇×一・一糎、「新吉原細見 全」(刷)。

15 嘉永二年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/11

① 「吉原細見」／『しんよし原さいけん記』

② 嘉永二年春

③ 替表紙

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤序(A)一丁

江口神崎のあかれりし世ハいかなりけん大磯化粧坂の鎌倉風も何とかやふるめきことそきてけはひなつかしからすそ有けんこの吉原の廓に衣の色目物の調度すへて何もくみやひかに上らうしくかつ今めき花やかなるかたさへまさりて世にありとある遊びの所定めをんにハ疑ひなき上の品にそ有へきそれか名寄の書をハ細見となんいふ年頃その摺形木伝へもたるものありて年に二たひ改め正すといへとも稀々にハ聊の訛りはたなきにしもひす又近き頃同しさまなる疑ハしき書もかつく見えしらかふめるを君かて、なる玉屋のあるしよろつまめくしき人にてこの秋その摺形木を残らすあかなひ得て家にをさめおよく心を用て何くれと改め正し今より露ハかりの訛りもなるへくおきて定めつこの後さる紛ハしき偽せ書ありとも見ん人其心してなまとハされ給ひそ

嘉永とあらたまれる年の初秋

一閑齋

序(B)半丁

君か館へ帰るを送れハ明月仲の町に満とは趙氏連城の玉の楼光ことなる花の街の曙のけしきにしてこ、につとへる君達の玉の光にくらへては彼照葉の玉といふとも石瓦とや見られぬへきされハ新玉の年立かへる朝千箱の玉章に玉のこと葉をつらねて客人をむかへ敷妙の

枕の下に白玉の玉手さしかへ玉くしけふたりかたらふむつことハ夜毎につもる玉の床玉の数々こまやかにつらぬきとめし細見記そへし初文初曆ふふしめときて明の方開て見れハよろつよし原

嘉永二年 西初春

六帖園述

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 序、壹、一〜四、五ノ六、七〜四十一 全43丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・田町編笠茶屋・山谷堀船宿・會所船持・土手茶屋・龍泉寺町茶屋・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永二年歳次己酉初春 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・七×一・九糎

⑭ 一四・二×一〇・七糎

⑮ 完

⑬ 序(A)に名主双印「濱」「衣笠」。序(B)「濱」「馬込」。

16 嘉永三年春 大学図書館・近世資料 384.915

① 志んよし原さいけん記／『しんよし原さいけん記』

② 嘉永三年春

③ 原表紙 浅葱色無地、後付け絵題簽「志んよし原さいけん記／戌の春改正」

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤ 序(B)半丁

璞あらたまのと、せの月日未通女等が。花はなのかざしの飾夜具かざりやぐ。  
美みを尽つくしたる錦繡きんしゅうに。突出つっきたしの物花ものばなハ全盛ぜんせいの余沢よたくに咲さ。  
身みをうくひすも春待はるまちて。初音はつねのけふの玉たまの床とこ。誰たが活花いけはな  
の新枕にひまぐら。流ながしの枝えだの水揚みづあけは君きみが伝授でんじゆの奥おくの手てなり実じつに  
一場いちやうの源みなもとにして。連城れんしゆうの壁かべを擲なつ恋こひの淵ふちに嘆あせ蜃しん気き楼ろうの浮うか  
む瀬せあり。金かねを升ますに豆まめ蒔まし。紀文きぶんが時代じだい忍しのばれて。今いま  
に替かはらぬ情なさけの路みち。総すべて曲輪まがわに源々みなもの初はつの逢瀬あふせの衣々きぬぐに。  
心こころひかる、後髮あごび。遊女あそびハ遊あそぶの偶ぐうなれば。賢愚けんぐ尊卑そんひの  
鬱散場うつさんば。老おひも若わかきかへ。暫しば免しほて呉織くれむし。あやにく他ひと  
に落おちあふも。彼かの三弦さんせんの拍ひ。わざと酔よひたる振あをして。  
過すくるが廓かの慣なれ也なり。昔むかしを茲こゝに呼統よびつぎの。蛤はまぐり売うる元日げんじつか  
ら狐きつね舞ま込この尾おしまで何いれか色いろを愛めさらめやハ。

庚戌初春

六采園二葉しるす

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 序、卷、一、四、五ノ六、七、三十五、又三十五、三十

六、四十一 全44丁

⑨ 見返し・序・五十問道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・山谷堀船宿・會所船持・龍泉寺町茶屋・刊記  
⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永二年歳次庚戌初春 玉屋山三郎藏板 (朱印)

⑬ 中本 縦 一七・七×一二・〇 横

⑭ 一四・〇×一〇・四 横

⑮ 不完

⑰ 序(A)欠

⑱ A 東京誌料本 [0792-42・0792-46]

B 対照本同士の異同は見られないが、実践本と比較すると、序文以外は完全な異板である。

17 嘉永三年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/12

① 「吉原細見」／『新よし原細見記』

② 嘉永三年秋

③ 替表紙

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤ 序半丁

殷いん・紂ちゆう敵てき鞍あ替か者しやの妃ひ己みに墜落はまり。夫差ふさ公こう西施せいしが色客しきやくとなつて呉国ごを傾か。虞氏よが突出つっきたしの水揚みづあにハ。項羽こううも范增はんぞうが忠言ちゆうげんを何なにの他人たにんの虚異見せういけんと聞流きんりゆうし。晋しんの旦郎たんらう。驪姫りきが年明ねんめい詰つの贅遣ぜいせんひに上身みを没收ぼくしゆうと沈醉しんざい玄宗けんげん皇帝てんてい楊貴妃やうきひが年明ねんめいに未練みれんの執心しゆくしんを残のこし。平相国へいしやうこくの坊ぼうさんハ生惡せいあくの乱姪らんしやくに一門いっもんの藩臣はんしんを困こせ。八艘はつそう飛と義経ぎけいにハ廊下らうか下げ鳥とりの癖くせこそ有あなれ。されバ傾国けいこくの一婦人いっふじんにハ。百万ひやくまんの大敵たいてきも舌したを卷ま。

朝日奈樊噲が力づくも甲斐なければ。正宗莫耶が劔も及ばず。切ても鑿ぬ合恍惚ハ。刺ども尽ぬ悪縁にして。色を色として賢にかへる癡呆子なし。そこで以て此一廓いつもお賑やかならずやナント皆様和漢良将野夫ならぬを思ひ秋の草花真さきかけし細見の封剪。六韜三略虎之巻ともめで給へや云々

嘉永三戊歳秋

十返舎一九記(印)

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 巻、一、四、五、六、七、三十二、三十三、四、三十五、四十 全39丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町蔭編笠茶屋・龍泉寺町茶屋

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永三年歳次庚戌之歳孟秋 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・六×一二・〇 横

⑭ 一四・二×一〇・五 横

⑮ 不完

⑲ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守/文庫」(朱、鏢形)、「鳶魚/飛躍」(朱、長方・三田村鳶魚藏書印)

⑰ 序に名主双印「村田」「米良」。山谷堀船宿・會所船持・刊記欠。「吉原の研究會(一)」一六ヶ町で十二人の會員

―(大正八年三月七日付「都新聞」)の切り抜き合冊。(無丁(四丁))

18 嘉永四年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/13

① 「吉原細見」/「新吉原細見」

② 嘉永四年

③ 原表紙 浅葱色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤ 序半丁

本舞台正面五十軒に簾新乗初の罵見返柳の釣枝に大門の片扉と細見の序を正本体を書いづれば柳巷ぞ春の戯場めき初道中の襦袢を紅みゆる赤沢山に思を争ふ恋角力堆積布初の蒲団の数の三箇莊彼兄弟か小袖の模様衛胡蝶ハ女童の名に呼彼画図にいふ富士峰の高きをしのお常灯明裾野を囲む幕張さへ風妓が照さす提灯の紋尽を比べ晋子が吟の暗の夜も花街ハ明き月小夜十六夜狐擬踊の半臂ハ鬼王団三の心に似て赤く大黒舞の頭巾ハ近江八幡の袴と共に柿なり立寄らバ大街の蔭長いものには好の出る戲謔万歳に籬に顔の並大名吉例の通笑も興あり、おつてえろとハ口舌の疝癩おとめ々とハ後朝の別路廓中総て曾我狂言に縁語なしといふべからず去れハ五巷と三街の間の堤も八町に横雲白む鴉飛



けんぼん  
見番の弦始に九郎助稻荷の宮神楽を被爰に正月二日の  
まくらぎ なつてきやうげんかたのふんはみま  
幕明 倣二 狂言方 文法一

嘉永四辛亥歳七月

柳下亭種員述(印)

⑦ さいけん (丁付) / さいけん (丁付)

⑧ 巻、一〜四、五ノ六、七〜三十九 全40丁

⑨ 見返し・序・五十問道筋と廓内茶屋などの見取図・本

文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶

屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所舩持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永四年辛亥之歳初秋 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑫ 中本 縦 一七・五×一・九種

⑬ 一四・一×一〇・四種

⑭ 完

⑰ 序に名主双印「村田」「衣笠」。

⑱ A 早大本 [ラ06-01531-6]・東京誌料本 [0792-34]

B この細見の異同では、まず「保」が「青」と入れ木される箇所が三例見られ、これにより実践本が先に刊行されたものであるとわかる。

十三丁オの和泉屋清蔵は、実践本では「若佐保」であるが、対照本では入れ木され、「若佐青」となる。

二十丁オの松田屋やすは、実践本では「美佐保」であるが、対照本では「佐」の一部と、「青」が入れ木さ

れ、「美佐青」となる。七丁オの相模屋新三郎は、実践本では「若緑／三佐保(いかの)」とあるところが、対照本では「三佐青(みさの)／若緑」となっている。しかし実践本「三佐保」と対照本「三佐青」では、禿の名が異なることから、これが同一人物かどうかの判断は難しい。

遊女が追加・変更される例は四例ある。実践本での十七丁ウの砂子屋ぢうに在廓する「袖浦」の次には誰もいないが、対照本では「袖浦」の次に「奈山」が入れ木で追加されている。同様に二十五丁オの露本屋きくの、実践本は「紅桜／九重／小桜」とあるのに対し、対照本では「紅桜／九重／千代里／小桜」となり、「千代里」を追加するため「小桜」が一度削られ、「千代里／小桜」と入れ木されている。

五ノ六丁オの和泉屋平左工門の実践本では、「染糸／言春／色糸／茂春／芳浦／玉里」とあるところが、対照本では全て入れ木され、「千代その／言春／色糸／茂春／芳浦／玉里」となる。実践本の「染糸」が削られ、対照本ではその箇所「千代その」が入る。

二十五丁オの佐野や柳左工門は、禿の名が異なる。実践本では「しけり／あやめ」とあるところが、対照本では「しけり／あやは」となる。また、実践本では

「佐野や柳左工門」とあるが、対照本では「佐野や柳左衛門」となる。

遊女が昇格する例は二例ある。実践本の廿九丁オの江戸屋亀五郎の「染川／梅の香／若葉」は6の格だが、対照本では5の格となり、昇格した。同様に、三十三丁オの加賀や重吉の「弥生／花里／小ひな／初梅／花遊」が6の格から、対照本では5の格に昇格する。

長家にも異同箇所が見られる。実践本では三十四丁オの見世之路・蔦屋やすに「政菊／多さと／桜木／／桜の／たつた川」とあるが、「たつた川」が対照本では「たつ川」となる（ここでは遊女達の名は区切られていないが、便宜上「／」で区切った。「／／」は改行をあらわす）。

また、名は変わらないが入れ木の箇所が二点ある。九丁オの尾張屋左次郎、「芳里」の「里」が入れ木され、同様に廿六丁ウの岡本屋長兵衛、「瓜の香」の「香」が入れ木される。

そして、入れ木ではなく、刷られた張り紙での異同が見られる箇所が二点ある。実践本の序丁、最終丁の刊記には張り紙がされている。序丁には「正月」とある上に「七月」と刷られた紙が貼られ、同様に最終丁の刊記部分には、「初春」とある上に「初秋」と刷ら

れた紙が貼られる。早大本の張り紙は両方とも剥がれており、東京誌料本は最終丁「初秋」の張り紙は残っているが、序丁「七月」は剥がれてしまっている。

○実践本（序丁）

嘉永四辛亥歳七月

○早大本・東京誌料本（序丁）

嘉永四辛亥歳正月

○実践本・東京誌料本（最終丁・刊記）

嘉永四年辛亥之歳初秋 玉屋山三郎藏板（朱印）

○早大本（最終丁・刊記）

嘉永四年辛亥之歳初春 玉屋山三郎藏板（朱印）

19 嘉永五年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/14

① 「吉原細見」／「新吉原細見」

② 嘉永五年春

③ 原表紙 浅葱色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」[年中月次もんど]

⑤ 序半丁

二日にもぬかりハせじな花の春東風吹通ふ見返柳は契  
情が心の賢なるを忍び糸遊絢る愛染桜ハ艶なる姿の華  
に比すべし袂ゆたかに初買の霞のころも衣紋坂紅緑

相対路柳牆花の殖溜ハさしも優き洞房の招牌去年の枝  
折の道かへて新に鑄れる桜木の此細見を披て復未見  
ぬ花の奥書を求玉へかし

嘉永五年壬子陸月

柳下亭種員序

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 壹、一〜三十九 全41丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所船持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永五年壬子之歲初春 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・七×一・七種

⑭ 一四・二×一〇・六種

⑮ 完

⑯ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鏢形)

⑰ 序に名主双印「村田」「衣笠」。

20 嘉永五年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/5

① 「吉原細見」／『新吉原細見記』

② 嘉永五年秋

③ 原表紙 浅葱色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤ 序半丁

一際心も浮立春は中の町の花にも限らじ菖蒲帷子袖軽き  
納涼がてらのあだ人のなげの情ハ珍らしかねど物の寂し  
き秋 晩も軒に炫く灯笼の登楼の音に通路を老馬も忘  
る、八朔の雪明り此里ばかり月夜とて嘉例の台の糸薄  
招て結ふ露の契りに霜枯知らぬ吉原の繁昌八年々々  
美人の数添ふこの細見を証とすべし嗚乎盛なる哉

壬子初秋

笠亭仙果(印)

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 壹、一〜三十九 全41丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永五年壬子之歲初秋 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・七×一・七種

⑭ 一四・三×一〇・七種

⑮ 完

⑯ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鏢形)

⑰ 序に名主双印「渡邊」「米良」。

21 嘉永六年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/16

① 「吉原細見」／「新吉原細見」

② 嘉永六年春

③ 外・替表紙。中・原表紙 浅葱色無地。

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤ 序半丁

この細見の一小冊は年々歳々春と秋に正して角町のす  
みまでも聊たがふことなきハ君がて、なる玉楼のある  
じが目水品にこそとうすのろきほめ詞を丑のとしのは  
るの序にかへて書つくるものは

癸丑初春

旭園輝雄

⑦ さいけん

(丁付)

さいけん

(丁付)

⑧ 巻、一〜三十七 全39丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本

文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶

屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所船持・刊記

⑩ 通りを巾にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永六年癸丑之歳初春 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・三×一・六糎

⑭ 一四・二×一〇・五糎

⑮ 完

⑯ 「浅野守／文庫」(朱、鐔形)

⑰ 序に名主一印「濱」。

⑱ A 東京誌料 [0792-62]

B 序文以外は完全な異板である。

22 嘉永六年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/17

① 「吉原細見」／「新吉原細見」

② 嘉永六年秋

③ 原表紙 浅葱色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤ 序半丁

浅草の大悲者の奥山なる秋の千草の花見にとまうでける  
に笹のものと花の錦を褥にて瓢の酒飲居る翁の汝飲楽  
を思ハ、我に随ひ来たれと手をとりにて彼瓢の中に躍入  
ぬ入て見るに一つの世界ありて入口に花と柳を植溝川を  
四方にめぐらして瑠璃の水を湛へ大門をかまへ玉楼金  
殿堂をなからべ綾羅をまとへる仙女群居て酒汲かハし  
今様唄ひて舞ひかなづるさま張文成がむかし覚て今と  
猶かゝる仙境ハ世に有けりあなおもしろとひとりこつ  
背をはたとうちていかなる夢をか見給へるといふハ小  
泉の主人なりけり例の細見記の序あまりにおくれぬとく  
くと催促されて今見し仙家の夢かたりを其儘しるして  
はし書にかふるになん

嘉永六年癸丑初秋

燕栗園

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 巻、一〜三十六 全38丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所船持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 嘉永六年癸丑之歳初秋 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・七×一・七糎

⑭ 一四・四×一〇・六糎

⑮ 完

⑯ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鐔

形)

⑰ 序に名主双印「濱」「馬込」／「玉山」。

23 安政二年春 大学図書館・近世資料 384/V 94/18

① 「吉原細見」／「新吉原細見」

② 安政二年春

③ 原表紙 浅葱色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど」

⑤ 序半丁

佳辰令月 歛無極万歳千秋 楽未異 人心のどけ

卯の春

寿界山人しるす

⑦ さいけん (丁付) / さいけん (丁付)

⑧ 巻〜三十七 全38丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 安政二年乙卯之歳初春 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・八×一・九糎

⑭ 一四・一×一〇・三糎

⑮完

⑯「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鐔形)

⑰序に改印「改」「卯正」／「玉山」

24 安政三年五月 大学図書館・常磐松文庫 384.9/3

①「吉原細見」／「しんよしはらかりたく細見記」

②安政三年五月

③原表紙 浅葱色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤序半丁

へかゝる山谷の草深けれど君が住家と思バよしや玉 台  
もおろかでござる」と小唄にうたひ初つるハ。明暦三年  
睦月とかやに。元吉原類焼なし。新吉原へ移間。鳥越  
山谷の農家を借。生業をしたる頃。何人歎文作せしにて  
當時を以て仮宅の起元とせり。扱其年をかゝなふれバ。  
込に添星うつり。物日のものもかハリゆきて。今年安政  
三年ハ。星霜全二百年。世ハ斯までに経ながら。廓中  
ハ漸に繁榮なす。去程に此小冊ハ。旧冬地妖の災を。  
免し高運佳妓の名を残なく載つれバ。美に愛既仮住  
花鏡。よし加俱津智の暴にハあへども。白眉神の擁護ハ  
拔群倍増て。廿四ヶ所の賑の。いふべくもあらざるハ。

是 大御代の豊恵と祝して叙詞を誌ものハ。くさぶ  
かけれど、昔謡。山谷にあハひ至近。今戸の辺に菴  
をむすべる。

丙辰陽春

墨水西岸の市隠

柳下亭種員(印)

⑦ さいけん (丁付) / さいけん (丁付)

⑧ 巻ノ三十三、三十三下、三十四ノ三十七 全39丁

⑨ 見返し・序・仮宅を免ぜられし地處の名・五十間道筋と  
廓内茶屋などの見取図・本文・新加入遊女屋名前追加之  
部・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶  
屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 安政三年丙辰之歳仲夏 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・六×一・六横

⑭ 一四・三×一〇・五横

⑮ 完

⑰ 仮宅(頭書)。序に改印「改」「辰五」／「玉山」。映入り。

25 安政五年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/19

①「吉原細見」／「新吉原細見記」

②安政五年春

③ 原表紙 浅葱色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もん日」

⑤ 序半丁

江口神崎ハ昔に遠く。大磯化粧坂ハこと旧たり。新吉原の繁栄ハ古今に比するものなきを。また新宅の洛成てより。以前に増し賑さ。春と秋との中の街。客人の行かひ雁と燕に等けれバ。品定の山形に初夢の不尽の根を思ひ。合印の二星に初秋の乞巧奠をも忍め。おほかたにあらそふものといひながらこゝろひとつに秋をさだめんと。四十二の物争にハ詠つれども。朝桜の露の地を侵し。八朔の雪の天を欺など。何れをか勝何れをか劣とせん。只管四時歡樂北里。といハんにハ不若。其面白章台に遊んにハ。此花鏡を携て。必廊中を細見し玉ふべし

安政戊午春

香以山人述

⑦ さいけん

(丁付)

さいけん

(丁付)

⑧ 一〜四十 全40丁半

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廊内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所舟持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 安政五年戊午歳初春 玉屋山三郎藏板 (朱印)

⑬ 中本 縦 一七・六×一一・八 横

⑭ 一四・四×一〇・四 横

⑮ 完

26 安政五年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/20

※25 安政五年春と同本同板。異なる⑬のみ記す。

⑬ 中本 縦 一七・四×一一・九 横

27 安政七年春 大学図書館・常盤松文庫 384.9/2

① 新吉原細見記 『新吉原細見記』

② 安政七年春

③ 原表紙 浅葱色無地

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もん日」

⑤ 序半丁

新吉原細見記之序

清少納言の物ハ附に。画劣するものハ桜とか、れたるが。上手の画といふとも。傾城の張と意気地ハ写されず。画で見たよりも嫫で見ると。無声の詩が言語ハ。玉のたまたるハ岡目にてハ観がたくや。描勝するといふ松ハ。鳥原の太夫に寂しく。新町の天神の粹なるも。都ぞ春の錦絵に。うりもの、花ハ飾れど。京撰絵の奉書摺より。柳桜をこきまぜて。三銀杏齒の外ハ文字。

内ぞゆかしき簾挿の髓甲。重の樹に繡紋の手を尽せる  
ハ長崎の衣装ハものかハ。とても及バぬ大江戸仕立。  
その正写の一枚絵。ものいはず不笑とも。余所にハ勝  
る東錦。絵に見てさへも吉原の。佳と精見て其玉を取  
得んと思ふ嫖客達ハ先此細見を看玉へとしかいふ

安政七庚申新春

梅素亭玄魚記(印)

⑦ さいけん (丁付)

⑧ 無丁(一丁)、二丁、廿二、無丁(一丁)、廿四、三十七  
全38丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本  
文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶  
屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所船持・刊記  
⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 安政七庚申歳初春 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・六×一・一・六 纏

⑭ 一四・六×一〇・三 纏

⑮ 完

⑰ 帙入り。序に改印「朱十二改」/「玉山」。(年表)

⑱ A 早大本〔ラ06-Q3056-2〕・東京誌料本〔0792-3〕

B 十丁才の大黒屋藤助に異同が見られる。のれんを含め  
区画ごと実践本と対照本は異なる。実践本では6の格  
の、つた春・つた浦・花里・あづま・玉糸・ひな糸・

しけ崎・つた梅・かつ山・舞春・とよ浦・玉はし・花  
山・せと梅・たまの・せと浦の十六名が、対照本では  
4の格に昇格することや、実践本では6の格の玉の井  
が、2の格に昇格することから、実践本が先に刊行さ  
れたものであろう。

○実践本・大黒屋藤助(十丁才)

2 蔦衣 / 2 玉床 / 2 玉章 / 2 雛鶴 / 2 舞衣 / 2 都路 /  
2 薰 / 2 政人 / 2 水瀬 / 2 五百機 / 2 千本 / 2 若艸 /  
2 小雪 / 2 玉琴 / 2 東路 / 2 錦木 / 2 此花 / 2 明石 /  
2 綾瀬 / 2 美代春 / 2 唐琴 / 2 於若 / 6 つた春 / 6  
玉の井 / 6 つた浦 / 6 花里 / 6 あづま / 6 玉糸 / 6 ひ  
な糸 / 6 しけ崎 / 6 三代實 / 6 つた梅 / 6 かつ山 / 6  
舞春 / 6 とよ浦 / 6 玉むし / 6 花山 / 6 つたはな / 6  
せと梅 / 6 たまの / 6 かめの / 6 此母 / 6 正文きく /  
6 せと浦 / 6 かふろ / わかな / ちどり / まさじ / みやこ  
／あけは / こまつ / うめの / かすみ / よしの / たまし  
／みどり / たより / まひじ / げいしや / ひと / いま  
／ちよ / よね / やりて / しげ

○対照本・大黒屋藤助(十丁才)

2 舞衣 / 2 薰 / 2 政人 / 2 雛扇 / 2 玉章 / 2 雛鶴 / 2  
雲井 / 2 五百機 / 2 若草 / 2 小雪 / 2 小菊 / 2 須木  
浦 / 2 玉琴 / 2 雛綾 / 2 都路 / 2 歌川 / 2 小松 / 2 紅



梅／2玉の井／4 蔦浦／4花里／4 蔦春／4 三代濱

／4 玉糸／4 吾妻／4 増花／4 雛糸／4 繁咲／4 勝山

／4 舞春／4 豊浦／／4 瀬戸浦／4 玉橋／4 蔦梅／4

瀬戸梅／4 花山／4 千年／かふろ／うめの／わかの

よしの／うすみ／あけは／たまの／みとり／みやこ

せまじ／まさじ／ちどり／小てふ／げいしや／いま

ちよ／せき／やりて／しげ

28 文久元年秋 大学図書館・近世資料 384/Y 94/21

①〔吉原細見〕／〔新吉原細見〕

②文久元年秋

③原表紙 浅葱色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤序半丁

清少納言ハ柳をさして広がりたるは憎しといへど爰に一種の柳巷花街仮に根ごして広これと憎むハお敵の悪性と鐘撞和尚の外ハなし其後朝もさまぐに大門口の望夫石落る泪が小砂利とぞなれるもあれバ猪とだかれて寝たりといとふもあり福者ハ野暮に意気ハ貧たゞ其程の程たるハ兼好法師が筆にも及ばし凹位風羅もいまだ見ぬ物いふ花の奥のおくそれが真ハ粹による客の実ハこれぞ彼枕のさうしの有がたき物の部へこそ入べかりけれ

辛酉仮宅の秋

臘月亭有人記(印)

⑦ さいけん (丁付) / さいけん (丁付)

⑧ 無丁(一丁)、二〜三十五 全36丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶

屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所船持・刊記

⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 文久元年辛酉年初秋 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・八×一・八横

⑭ 一四・六×一〇・四横

⑮ 完

⑰ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鐔

形)

⑱ 序に改印「西七改」／「玉山」。仮宅(「深川之部」)「松

井町之部」「根津之部」等、別立て。茶屋は合印にて仮

宅場所を示す)。

29 文久二年 大学図書館・近世資料 384/Y 94/22

①〔吉原細見〕／〔新吉原細見〕

②文久二年

③原表紙 浅葱色無地

④「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤ 序半丁

新吉原細見之序

手管てくだの新年しんねん々に殖かえて。五色ごしきの外の色を争あそひ。桜さくらに続つづく菖蒲しやうぼ草ハ。月影かげに世を譲ゆづりて。仁和歌にわかの錦にしきと肩かたを双ならべ。秋草あきくさの色入いりに手毎てごとを盡つくす事。唯ただの鼠ねづみの及およぶ所ところにあらず。細見こまハ曲輪まがわの小紋こもん張ちやうにして。注文ちゆうもん次第しだいの好このみに應おずれば。客きやくの骨折ほおぞ紺搔こんかきに等ひとしく。工手間くでまを惜をしまぬ丹精たんせいに依よらば。情なさけの道みちの染ぞめ上あり濃うすも手ての内うちに有あり可べし。

文久壬戌改正

かういしるす(印)

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 無丁(一丁)、二丁三十八 全39丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・會所船持・刊記  
⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪ 文久二壬戌年 玉屋山三郎藏板(朱印)

⑬ 中本 縦 一七・六×一・七糎

⑭ 一四・五×一〇・四糎

⑮ 完

⑯ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守/文庫」(朱、鐔形)、「桜・楓の間に「巴紋」文庫」(朱、円形)

⑰ 序に改印「玉山」/「戌五改」(年表)。

30 慶応四年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/23

① 「吉原細見」/『吉原細見記』

② 慶応四年春

③ 原表紙 浅葱色無地 「日本道中記」書き入れ

④ 「揚代金直段附合印平日定」「年中月次もんど日」

⑤ 序半丁

吉原細見記之序

這この花街はなまちこ、に移うつりしより。花蛤はなかくりうり来る春はるの朝あし白狐舞きつねまひ込歳ことしの尾おまで。恋情こいしでまろめし別乾坤わかつかん。かうし南枝なんしの梅うめの花行はなゆきかふ人に香かを留とめて。オヤバカラシイ女閨むすめ訛まじりに。老実まめ的めも招夫まうとも。俱ともにうかれてさしのぞく榕子かうしにあらぬ此艸ここのくさ紙しハ。太夫まづの位の品定め。思おもひ出でさずに忘わすぬため。晴はて逢夜あふやの神媒かみに一卷いっせんツ、ハ。香枕かまくらと供ともに必かならず愛玩なぐわたまへといふ

戊辰の梅月

楽木山人謹んで白す(印)

⑦ さいけん

(丁付)

⑧ 一丁三十七 全38丁

⑨ 見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・刊記  
⑩ 通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪慶應四戊辰年 玉屋山三郎藏板（朱印）

⑬中本 縦 一七・五×一・一・五糎

⑭一四・三×一〇・四糎

⑮完

⑰仮宅（「深川之部」として別立て、茶屋は頭書）。

31 明治三年春 大学図書館・近世資料 384/Y 94/24

①「吉原細見」／「新吉原細見記」

②明治三年春

③原表紙 浅葱色無地

④「御高札之寫」「年中月次もん日」

⑤序半丁

新吉原細見記序

道の道とすべきハ常の道にあらざる名とすべきは常の名にあらざるれば閨情の道年々に推移り遊女達が名ハ月々に更るその名をしるす細見記でれんてくだは玄の又玄粹も不粹も通の又通衆妙の門蓋し此中にあらむ

明治庚午孟春

花柳園主人誌（印）

⑦ さいけん

（丁付）

⑧ 一〜廿二 全23丁

⑨見返し・序・五十間道筋と廓内茶屋などの見取図・本文・男藝者之部・女藝者之部・土手茶屋・田町編笠茶

屋・龍泉寺町茶屋・山谷堀船宿・刊記・揚代金直段附合  
印平日之定

⑩通りを中にして向かい合わせ 江戸町一丁目から

⑪明治三年春 玉屋山三郎藏板（朱印）

⑬中本 縦 一七・六×一・二・〇糎

⑭一四・八×一〇・五糎

⑮完

⑰序に改印「巳十二改」／「玉山」。

明治に入つても板元は玉屋のままであり、形式に大きな変化は見られない。見返しの「御高札之寫」は次の通り。

「 覺

一 東京町中端々ニ至る迄遊女の類隠し置べからず若違  
犯之輩あらバ其所の年寄五人組地主まで曲事たるべき  
もの也

明治二年四月 東京府」

「 覺

一 醫師之外何者よらず乗物にて門内へ立入候儀停止の  
事

一 鉄砲其外兵器を携又は馬上にて門内へ立入候儀停止  
の事

一 刀脇差等遊興之席携へ候儀停止の事  
右之條々堅く可相守もの也

明治二年四月 東京府

32 大正五年 大学図書館・近世資料 384/Sh 69

①新よし原細見／『新よし原細見』

②大正五年三月

③替表紙

④無地

⑤序一頁

「痴話文を照らすは誰そや朧月

大正五年三月 五蘭南史(印)」

⑥娼妓の肖像写真(片面六頁)

⑧(写真六頁、頁付なし)、一々四、頁付なし(六頁)、一

々九十三、頁付なし(五頁)

⑨娼妓の肖像写真・大正五年五月廿日改正揚代價格表・

序・凡例・祝新吉原細見發行(広告)・廓内電話番號・

本文・翳間之部・仲之町藝妓連名(一々三等)・六街藝

妓之部・小藝妓之部・刊記

⑩上下二段 江戸町二丁目から

⑪明治廿六年十二月五日印刷 明治廿六年十二月八日發行

明治卅四年四月廿二日印刷 明治卅四年四月廿五日發行

明治卅七年三月八日印刷 明治卅七年三月十一日發行

明治卅八年三月十日版權讓渡

明治卅九年一月五日印刷 明治卅九年一月十日發行

明治四十一年二月廿五日印刷 明治四十一年二月廿八日發行

大正二年三月三十日印刷 大正二年四月三日發行

大正二年十二月廿八日印刷 大正三年一月二日發行

大正三年十二月廿五日印刷 大正四年一月一日發行

大正四年三月廿七日印刷 大正四年四月一日發行

大正五年三月十八日印刷 大正五年三月廿一日發行

東京市淺草區新福井町三番地

編輯兼 富里昇

發行者

東京市日本橋區鐵砲町十三番地

印刷人 三浦良平

東京市淺草區新福井町三番地

發行所 昇進堂書店

東京市淺草區新吉原仲の町

特約販賣 花舩堂

同 吉原検査場前

特約販賣 坂野煙草店

販賣所 各書店及雜誌繪双紙店

⑬四六判 縦 一八・三×一二・三糎

⑮完

⑩ 「浅野守文庫」(朱、長方)、「浅野守／文庫」(朱、鏗形)

⑪ 仮宅(「深川之部」として別立て、茶屋は頭書)。

(二) ことう ひとみ・実践女子大学院博士前期課程)